

研究課題名：若年がん患者を取り巻くがん診療・緩和治療支援の政策提言に資する研究

課題番号：H24-がん臨床-若手-001

研究代表者：国立がん研究センター中央病院乳腺・腫瘍内科 医長 米盛 勸

1. 本年度の研究成果

本研究は、診療録からの情報収集による後ろ向き研究と患者と家族を対象とした前向き研究を行い、班会議において若年患者の問題点と支援ニーズを検討した。以下に本年度の研究成果を述べる。

(1) 後ろ向き研究

40歳未満の乳癌・肉腫・原発不明癌・胚細胞腫の死亡した患者のうち、がん種に関係なく約10%が在宅での死亡であり、若年がん患者では40歳以上で利用できる介護保険による在宅介護支援のない状況で死亡していることが明らかとなった。

(2) 前向き研究

研究計画書に従い、がん患者119人（40歳未満：59人、40歳以上：60人）の調査を3施設で実施した。疾患割合は（乳がん：約80%、肉腫：約10%、婦人科がん：約5%、その他）であった。若年がん患者の25%は世帯主であり、子供がいる患者が3割、未婚者が4割、両親との同居は3割であった。若年がん患者のうち、減収となった世帯は60%を占め（100万以上300万未満の割合が最大）、治療費・経済面・仕事・家族の不安は、40%近くの患者が訴えていた。また、相談支援センターの認知度は7割であった。実際の利用歴は25%であり、今後の利用がないと答えた患者は64%に上った。40歳上の患者において終末期に過ごしたい場所は、ホスピス、自宅を占めていたが、若年がん患者ではホスピス：6.8%、自宅：10.2%であった。解析では、子供のいる若年がん患者は家族（子供）に対する不安を持っており、経済的な不安も強いことがわかった。また、がん家族歴のある患者は相談支援センターの認知率や利用率が高い傾向があった。

(3) 若年がん患者における精神心理的苦痛に関する前向き研究

日本の疫学調査では概ね4-7%のがん患者にうつ病が認められる。今回、40歳未満の若年癌患者33人を対象にプライマリケア領域で使用される精神障害の診断補助ツールであるPHQ-9を実施し、精神・心理的問題の検討を行った。PHQ-9の平均得点は、 4.42 ± 3.81 点、介入が必要な抑うつ状態は12.1%、精神科受診希望が24%いた。抑うつ症状による生活困難度（困難・やや困難）は、33%であった。今回の研究で、若年がん患者におけるうつ描画疑われる割合は、本邦の有病率に比べて高い水準にあり、また、不眠や倦怠感の訴えが多いことは他世代と同様であるが、若年がん患者においては、特に無価値観・罪悪感を毎日認めている患

者が他の世代に比べて多いことが分かった。若年がん患者では、仕事や学業における中断・退職や家庭における役割を果たせないことが原因となっている可能性があると考えた。

2. 前年度までの研究成果

(1) 後ろ向き研究

『癌診療・固形悪性腫瘍患者の終末期ケアおよび福祉サービスの利用実態調査』として、研究計画書を国立がん研究センター中央病院 研究倫理審査委員会へ提出し、承認を受けた後、国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科で診療を担当している複数の悪性腫瘍領域（乳がん・婦人科がん・肉腫・胚細胞腫）の診療録より情報を収集する形で研究を開始した。

① 乳がん

2008年4月から2012年5月までに国立がん研究センター中央病院 乳腺腫瘍内科で治療した。乳がん終末期患者で、死亡または終末期ケアを受けた患者195例を、当科データベースより抽出し診療録より情報収集を行った。

① 婦人科がん（卵巣がん・子宮体がん・子宮頸がんなど）

40歳以下の婦人科がん患者で診療を受けた242例中死亡した患者は31例であり、死亡時年齢の中央値は30歳、緩和治療導入から死亡までの期間の中央値は99.5日であった。死亡した場所は、在宅：2例、国立がん研究センター中央病院：6例、他院緩和ケア病棟：21例、詳細不明2例であった。診断時、有職患者は15例で、残り半数は主婦であった。緩和治療導入から死亡までの期間中央値は、有職患者が不就業患者に比べて長い傾向があった。

② 肉腫

症例数 120 例程度を集積目標として、診療録から情報収集を開始した（約 50 例調査終了）。胚細胞腫瘍目標症例約 100 例をととして、診療録より情報収集を開始した。（30 例調査実施）。

(2) 前向き研究

前向き研究のプロトコール・説明同意文書・調査票を研究班内（第1回班会議：平成24年5月22日（火）於国立がん研究センター中央病院会議室）で検討のうえ作成した。2012年11月より各研究実施施設の研究倫理審査委員会において承認された施設より症例登録開始とした。

3. 研究成果の意義及び今後の発展性

本研究班では乳がん・婦人科がん・肉腫・胚細胞腫疾患などの若年層（40歳未満）患者を対象の中心とし、患者目線に立ったがん診療・終末期医療・医療福祉サービスを検討することとした。この年代は多様なライフステージ（親の保護下にある未成年、成人しているが独身、雇用の不安定・業務負担が大きい職種（非正規雇用・管理職等）、子育て期間である女性など）が存在している。今回の後ろ向き調査で、癌腫に関係なく死亡した40歳未満の若年

がん患者の約10%は在宅死亡であったことがわかった。また、これは前向き調査の終末期を過ごしたい場所（自宅）の割合と一致していた。終末期を家庭・家族と過ごすのに40歳以上の末期がん患者が利用できる介護保険による支援サービスの対象でない患者層であることが明らかであり、年齢による支援制度の欠落は改善の余地があると考えられる。

本研究課題は、質的研究ということで大都市圏の病院とがん拠点病院と限られた施設で実施されたため、地方の病院における幅広い調査が必要と考える。また、今回の質的調査で浮かび上がった若年患者特有の経済的不安や精神的苦痛の要素、相談支援センターへの認知の低さの要因等を重点的に大規模調査したい。これら若年特有の問題を踏まえた質の高い『繋げる・繋がる』支援ネットワーク体制と対策を検討することが今後可能と考える。また、医学部教育やがん診療に携わる医師に対する社会支援の啓発や全国の相談支援センター員を対象とした若年患者相談の教育指導プログラムやCase study集・Webベースの支援コンテンツ開発を行いたい。本研究課題で得られた成果は、医療サービス・公的支援のあり方を検討し、質の高い支援サービスの還元となりうる。また、がん対策基本法において、すべてのがん患者及びその家族の負担・苦痛・不安の軽減並びに療養生活の質の向上につながり、わが国の若年癌患者の診療や終末期医療政策において有用な情報に資すると考えられる。

4. 倫理面への配慮

本研究は、後ろ向き研究と前向き研究からなる。後ろ向き研究については、国立がん研究センター研究倫理審査委員会において研究承認を得て実施した。前向き研究については、多施設共同研究であることから、各施設における研究倫理審査委員会にて審査・承認されて研究実施とした。承認が得られた後、ヘルシンキ宣言、疫学研究的倫理指針、個人情報保護法等の本研究に関して関連する指針や法に沿って、患者や家族から適切に説明・同意を文書で取得し、適切に研究を実施した。

5. 発表論文

1) 学会発表

清水 華子、田辺 裕子、友松 純一、公平 誠、温泉川 真由、米盛 勸、清水 千佳子、田村研二、安藤正志、藤原 康弘 40歳未満の若年婦人科がん患者における終末期医療の実態調査 第10回日本臨床腫瘍学会学術集会 大阪 2012年7月26日

大松 尚子. セカンドオピニオン関連の相談の一考察. 第17回日本緩和医療学会学術大会. 神戸 2012年6月23日

大松 尚子. がん医療における“メディカル・ソーシャルワーカー”の役割. 第10回日本臨床腫瘍学会学術集会. 大阪 2012年7月28日

谷山智子, 橋本堅治, 平川晃弘, 勝俣範之, 公平誠, 米盛勸, 温泉川真由, 清水千佳子, 田村研治, 安藤正志, 藤原康弘. 標準化学療法抵抗となった患者の予後予測. 第10回日本臨床腫瘍学会学術集会, 大阪, 2012年7月26-28日

Eriko Nara, Makoto Kodaira, Akihiro Hirakawa, Harukaze Yamamoto, Mayu Yunokawa, Kan

Yonemori, Chikako Shimizu, Yasuhiro Fujiwara, Kenji Tamura. Survival of Non-frail elderly patients treated with chemotherapy for soft tissue sarcoma: A comparison with non-elderly patients.

International Society of Geriatric Oncology 2013, 24-26/Oct/2013 Copenhagen

2) 公表論文

大松 尚子、大松 重宏、小郷 祐子ほか. 患者会における若年乳がん患者のピア・サポートのあり方. 医療と福祉. 91 : 41-46, 2012

大松 尚子. セカンドオピニオンにおける相談の一考察. 医療と福祉. 92 : 53-57, 2012

Harano K, Yonemori K, Hirakawa A, Shimizu C, Kodaira M, Yunokawa M, Yamamoto H, Tamura K, Katsumata N, Gemma A, Fujiwara Y. The Role of demographic, familial, and clinical characteristics on the choice of the end of life care location and the survival contributions of caregivers in patients with terminally ill breast cancer patients: A retrospective single center study. Palliative & Supportive Care (投稿中)

6, 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③所属研究機関及び現在の専門(研究実施場所)	④所属研究機関における職名
米盛 勸	若年希少癌を対象とした臨床研究および研究総括	国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科 臨床腫瘍学 (同上)	医 長
平川 晃弘	臨床情報の解析	名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター 生物統計学、バイオインフォマティクス(同上)	講 師
大松 尚子	患者・家族面談・調査による臨床研究	大阪市立大学医学部附属病院 がん相談 (がん相談支援センター)	相談員
小松美智子	患者・家族面談・調査による臨床研究	武蔵野大学人間関係学部社会福祉学科 医療ソーシャルワーク (同上)	教 授
清水千佳子	若年乳癌を対象とした臨床研究	国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科 臨床腫瘍学 (同上)	医 長
温泉川真由	若年婦人科癌を対象とした臨床研究	国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科 臨床腫瘍学 (同上)	医 員